

令和7年度 広島県高等学校教育研究部会 書道部会 夏季研修会 報告書

【授業研究・研究協議】

広島県立松永高等学校 河崎美和子

午前中は広島県立賀茂高等学校の迫眞一郎教諭が授業研究を行い、それを参観した。本授業は「漢詩の作品を書こう」をテーマに、書道I選択者20名を対象とした授業であった。全10時間の第5・6次である本時は、生徒が「蘭亭序」と「争坐位文稿」のどちらかを選択し、指定された箇所の臨書作品を練習するものであった。授業の流れは以下のとおりである。

- 1 臨書する古典の選択・選択理由を含めて説明させる
- 2 前回書いた作品の自己添削
- 3 自己添削を踏まえて前半4文字の清書
- 4 後半4文字の練習
- 5 自己添削
- 6 本時の振り返り

授業中の生徒は、2時間連続の授業にも関わらず、Google classroom に配信されている迫先生自作の運筆動画や手本の画像を視聴しながら、黙々と練習に取り組む姿が印象的であった。

迫先生の授業や授業に至るまでの準備で一貫していたのは、「生徒が古典や自分の作品と対話する時間を増やす」という視点である。迫先生が運筆動画の作成に至った経緯を「生徒の練習時間を増やすため」と説明されていた。全体への指示は最小限にとどめ、運筆動画や手本の画像を手元のタブレットで視聴させる方法は、生徒の練習時間及び机間巡視で個別に指導する時間を多く取るために効果的な手立てだと感じた。

また、机間巡視をされている際も、「困っていることはない？」と個別で生徒に声をかけ、生徒が質問した箇所に絞って助言や範書、生徒と一緒に書字を行われていた。他にも、自己添削で生徒ができているポイントや改善点を数多く挙げていたが、生徒が記入するコメント量を増やすために、迫先生は古典のコピーや提出させた生徒の作品の写真にコメントを入れることはあるが、朱墨で添削することはないと仰っていた。生徒が練習し、書いた作品を見て改善点を考え、次の練習に生かすというサイクルが常に行われており、主体的・対話的で深い学びに繋がっていた。

その後の研究協議では、①本時の授業の気づきや感想、質問、②実践例の共（ICT機器の効果的な活用）をテーマに、グループごとに意見の共有を行った。内容は以下のとおりである。

①本時の授業の気づきや感想、質問等

- ・ 運筆動画や資料が丁寧に用意されていてわかりやすい。（迫先生は「行書の運筆（回転運動）に着目した動画」「臨書の全体動画（起筆と収筆に着目）」「筆脈に着目した動画」「筆順に着目した動画」を準備され、Google classroom に配信されていた）
- ・ 自己添削をする時間は、生徒が自分の作品と向き合っていた。細かい指示がなくても動ける生徒がすごい。
 - 指導者のアドバイスだけだと、こだわりの強い子は受け入れてくれないこともある。どうすればこの状態までもってこられるのかを知りたい。
 - （迫先生より）1学期の楷書古典の臨書の時にも自己添削の時間を設定し、コメントがなかなか書けない生徒には、注目するポイントを示してコメント量を増やすよう促していた。
- ・ 古典の振り返りで王羲之・顔真卿の気持ちを考えさせる発問や、古典を選択した理由に「書きやすかった」と記載した生徒に対し、「なぜ書きやすかったのか」「より深く説明しよう」という発問が効果的であった。
- ・ タブレットで示すと、スクリーンよりも明確に提示でき、生徒が学びやすい。苦手意識を捨てて取り組みたい
- ・ 手本動画ばかりを見て臨書する生徒がいたので、古典の原本から離れてしまうのでは…？
- ・ 書いた作品や自己添削を相互批評できる時間があればなお良かった。
- ・ 協働的な活動の時間がもう少し組み込めたのでは？
 - （迫先生より）次回は同じ古典を選択した生徒同士（上手な生徒といまひとつな生徒を混ぜて）グループを組む予定
- ・ 生徒の成長を見取ることが難しいか…？
 - 何ができるようになれば良かったのか、もう少し説明があれば…
 - 変化を見取るなら、初めから動画を見させない
- ・ 目標をもう少し明確にすべきでは？何度も声掛けをすることで学びが深まる
 - もっと具体的に絞る必要あり
- ・ 筆の使い方（直筆・側筆の使い分け）の声掛けが必要あり…？
- ・ 筆順があやしい生徒（行書における筆順の大切さ）には、間違いやすい字を確認する必要がある

② ICT機器の効果的な活用

- ・タブレットがないと難しい時…同じ古典を選択した生徒が隣同士になるよう移動させる
→共有する機会を設定するとより良いか…？
- ・作品と制作中の姿勢・筆の持ち方を生徒同士で撮影させる
- ・書画カメラの使用（ポイントを言語化して伝えることと書いてみせることの両方が必要）
→あえて失敗例を試書し、何が足りてないかを生徒に考えさせる
- ・スライドでポートフォリオを作成させる（ロイロノート、Canva等）
→PCによっては制限が多いから難しい
- ・作品の評価…写真で提出し、コメントを入力させる
事前にシートを作成し、自己評価や振り返り（〇行以上等と指定する）を入力させる
→本人の手元にもまとまって残る

【実技研修「拓本の取り方」】

広島県立呉商業高等学校 細井 扶充子

今回の実技研修会は、授業研究に引き続き広島県立加茂高等学校の迫 眞一郎教諭が拓本の取り方について指導してくださった。拓本を取るという経験が初めての参加者や学生時代に体験して以来であると話す参加者もあり、非常に有意義な時間となった。迫先生が指導してくださった拓本の取り方等については以下のとおりである。



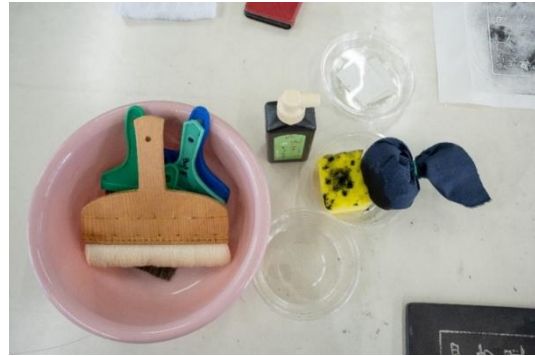
【準備物】

物品	数量	備考
スポンジ	1つ	
タンポ（大）	1枚	今回は研修の中で作成
タンポ（小）	1枚	
墨液	適量	本来は刷ったものが良い
プラスチックケース	1つ	スポンジが収まるサイズ
雑巾	数枚	新しいもの
画仙紙	1枚	薄手の用紙が望ましい
刷毛	1つ	毛足が短く、硬い毛質のもの

【タンポの作り方】

布（綿素材できめの細かいもの）に
作りたいサイズに合った適量の綿を包み、
輪ゴムで縛る。

この時、タンポの丸い部分が固くなる
くらいしっかり綿を詰めて縛っておくと
拓本を取るのに適したタンポができる。



【拓本の取り方】

- ① 碑面に画仙紙を当て濡らした雑巾で紙の表面を湿らせる。この時に紙をこすらず、押し当てるようにしたり、碑面の上を転がしたりするように行うとよい。画仙紙を濡らしすぎた場合は、乾いた雑巾で、水分を少し吸い取るようにする。



- ② 碑面全体が湿ったら、刷毛で紙を叩き碑の文字部分を窪ませる。この作業が甘いとも文字が鮮明な拓本にならないので丁寧に行う。また、この作業の中で紙が破れてしまうことがあるので注意する。



- ③ 紙面が乾くまで少し待ち、乾いたらタンポで墨を打っていく。墨を薄めて拓本を取ると石碑の碑面を汚さずに拓本を取ることができる。濃い拓本を取りたい場合は墨を重ねることで濃い拓本にすることができる。



- ④ 紙を石碑からはがし、乾かす。

